

園田女子大論文集 5 (1970)

ユーモアについて——Dickens の作品を中心として

横 田 国 男

私どものように英米文学を専攻しているものにとって、大きな障害になり、負担を感じるのは「ユーモア」なるものの存在です。同時にこの「ユーモア」が英米文学にあっては、'style' の一つとして重要な役割を占めていることです。'humour' とか 'satire' とか 'wit' といっても、さてその正体はというと、なかなか截然と区別しがたいものです。殊に日本人には「ユーモア」を解する心がないといわれているごとく、「ユーモア」を知ることは猶さら困難な課題です。

'humour' の語源はギリシャのヒポクラテース (Hippokratēs ギリシャ最大の名医で B. C. 460~375) の頃から用いられたもので、(ユ)ウモーレム、即ち「うるほい」「しめり」から出たものです。11世紀、12世紀の頃のアラビア医学でいうと——人間の体内には四つの「うるほい」、詳しくいうと「血」と「痰」(ねばり)と普通の黄色の「胆汁」と(そんなものはない筈だが)「黒い色の胆汁」(または「ゆううつ液」)の四種類の液体がありました。それが色々に混合されると、その混り具合で、われわれの気分が決まるといわれてきました。「血」が勝てば、多情多感で陽気に、「痰」が勝てば、粘り強く、物事に冷淡になりがちとなり、「黄色い胆汁」が勝てば、癩しゃくが募って怒りっぽくなり、「黒い胆汁」が勝てば、気分が沈みがちで、むらになりやすい。これがユーモアの本来の意味で、つまりユーモアの正体でした。このことについては、チャーサーという偉大な英国の詩人が、「尼寺侍僧の物語り」その他の個所で面白くとりあげています。ところが、この「体内の四つのうるほい」の調合具合はなかなか理想的にうまくゆかない。大概は、どちらかに強く、または、少しずつ片寄りすぎて調合される。こんなわけで、人間は大概片寄った気分の者であるから、人間の行ないはとかく風変りで、変で、おかしいのが普通です。こんな次第で、初めは「体液」——「気分」とか「性分」とかいう意味であった「ユーモア」という語が、次第に「気まぐれ」「おかしみ」「滑稽」「諧謔」という表現に移って今日にいたっています。

「諧謔」を一、二日本語の辞典にあたってみますと、次のような説明に出くわします。

- (1) 「おもしろみのある戯れの云行」「おどけ」「じょうだん」「しゃれ」「こっけい」(辞海より)。
 - (2) 「おもしろみのある戯云」「おどけ」「しゃれ」「滑稽」「ユーモア」(広辞苑より)。
- ところで和英辞典を調べてみますと、次のように説明しています。

A 「おどけ」

「おどけ」 *pleasantry : drollery : clownery : an attempt at humour* (研究社「新和英中辞典」)

「おどける」 (make a) *joke : be funny*

「おどけた」 *funny : comical : humorous* (三省堂「コンサイス和英」)

「おどける」 *jest : joke* (研究社「新和英小辞典」) その他。

B 「じょうだん」

「冗談」「戯云」 *joke : jest : wisecrack* (ぴりっと気の利いた)。「からかい」 *chaff : fanter* (研究社「新和英中辞典」)「冗談」 *joke : jest : prank* (三省堂「コンサイス和英」) *joke : jest : fun*。「戯れごと」 *sport (prank) : trick* (研究社「新和英小辞典」) その他。

C 「しゃれ」(ここにいたって初めて‘humour’なる語がでできます)

「しゃれ」(言葉の) *witticism : joke : jest*

「地口」 *pun* その他。

「しゃれた」(言葉の) *witty : humorous* (研究社「新和英中辞典」)

D 「こっけい」

「滑稽な」 *funny : humorous : comic(al) : laughable : ludicrous* (研究社「新和英中辞典」)

「滑稽」 *fun : joke : jest : humour (humor)* その他。

E 「諧謔」 *jest : joke : humour (humor)* (研究社「新和英中辞典」) ※辞典によって重複している場合は省略しました。「諧謔」の字をつかっていない辞典もあります。

F ‘humor’を英和辞典で見ますと次のように出ています。

(1) (持前の) 気質。気性。(2) (一時的の) 気分。気持。きげん (mood)。「むら気」「気まぐれ」「気どり」「移り気」。(3)「おかしいこと」「おかしい点」:「こっけい」「上品なしゃれ」「ユーモア」「ユーモアを解すること」「ユーモアに富んだ言葉(文章)」(注意)‘wit’は知的であるが、‘humor’は情的である。(4) (古)「かんしゃく」「気むずかしさ」。(5) (古生理)「体液」。その他。

G 「ユーモア」を日本語辞典で見ますと、(1)「思わず微笑させるような上品なこっけい」(辞海)(2)「上品な洒落。おかしみ。諧謔」(広辞苑)その他。ざっと、かくかくの次第です。

私の考えを持ちだす前に、その道の人言葉を聞いてみたいと思います。アンリ・ベルグソン (Henri Bergson 1859~1941) は「笑い」‘Le rire’のなかで、機智と滑稽をこう区別しています。——『ある言葉を、これを口にした人に対して、われわれが笑いを催し

たら、その言葉は滑稽であると云える。第三者または我々について笑いを催したら、その言葉は機智的と云える。然し大抵の場合、その言葉が「滑稽か機智に富んでいる」か、と考えると仲々決定しがたい。ただ云えることは、両方とも「笑いを誘うものだ」と云うことだ。漱石は次の如く解釈しています。——「ヒューマア」とは人格の根底から生ずる可笑味である。他の言葉で云うと、「ヒューマア」のある人の行為は、他から見ると可笑しいが、当人は、他から可笑しがられる訳がないと思っている。本人は真面目である。無意識に可笑味を演じている。もう一度云い直すと、可笑味が本人の天性、持って生れた木地から出る。従って、取って付けたように見えない。行雲流水の如く自然である。之に反して、もし人を笑わせるという結果を予期して可笑味を演ずるならば、本人は如何に巧妙に道化ても、道化を自覚してやっている。——即ち不自然である。内から湧いたものではない。（文学評論より）。（私の解釈によると、これはウイットであります）勿論こう区別したからといって、この二つのものが明瞭に区別されて、作品の上にも、実際にも現われるものではありません。こう解釈してみますと、「ユーモア」をもっている人は、人間としてどこか常識を欠いていなければなりません。

岡倉由三郎（岡倉天心の弟で英語、英文学者）は「ユーモア」と「茶の哲学」をこう結びつけています。『茶の哲学、茶人の物の観方、感じ方には、人間及び人間の住む天地の間の万物に対して、深いいつくしみがあって、無力な癖にお山の大将顔の振舞を得意でやっている。我々人間のみじめさを達観するにつけて、自然に微笑みも浮び、眼頭もいつしか涙で熱くなる。その笑いと涙の交響楽が「茶」の人生観の基本であり、「茶人」の心境であるのだと私は感じている。面白いことに、今日云う「ユーモア」も亦それと同じく、一方の眼には笑いを、今一方の眼には涙を、人間のか弱い姿、天地の広大な囲いの中に、ぼつりと置かれて途方に暮れたり、空威張りしたりしている吾々人間のいとしの有様の上に、等分に注がれることを、その基本の性質としている。それ故に「奇智」のまなこで物事を眺め、「頓才」のメスを振廻して頭脳で人事を批評するのは‘wit’の仕事で、‘humor’の仕事ではない』（英語青年76巻8号「ユーモアの正体」）。「をかし（おかし）」この言葉は平安時代には「あわれ」とともに「情趣のある美」を意味していました。ただ「おかし」は「花やかに明るい美」を主としていました。枕草子には美の規準として「あわれ」よりも重んじていたようです。「おかし」は「花やかに明るい美」であるために、次第に「笑」や「滑稽」を指すようになる。平安時代にも「笑」の意に用いた場合もあるが、中世以降になると「笑」や「滑稽」を主として指すようになったといわれています。狂言の「おかし」がそれであるといわれています。

主観をおし進め、それに徹するところには「しゃれ」「頓智」「頓才」「冗談」といったものは生れるが、「ユーモア」は生れない。自己を客観するところにこそ「ユーモア」

が生れる。「涙を通しての笑い」，こうした「ユーモア」を構成するには，物の底まで見抜く鋭い観察眼と，人間は「はかないもの」「頼りないもの」「憐れなもの」，として人間の過失や欠点を温く抱き込む「寛容」が必要です。短歌には「ユーモア」が少なく，俳句，川柳にこれが多く見られるのも人生観照の態度の相違でしょうか。この点俳句が「茶の哲学」に通じるのもこの故ではないでしょうか。とにかく「ユーモア」はこれだと云い切ることは大変困難であり，恐らく不可能でしょう。また同じく「ユーモア」と云っても，国により，時代により，さらには，同じ時代でも夫々の作家によってさえ区々で雑多で雑種で，流動的であるのが「ユーモア」の姿ではないでしょうか。例えばイギリス文学には「ユーモア」が多く盛りこまれていると云われています。ところが今日よく読まれている Lawrence の作品には「ユーモア」がない（極めて少ないと云うのかも知れませんが）と云われています。然し Chaucer を始め，みなさんお馴染みの Shakespeare, Swift, また Dickens その他に及ぶ系譜は，一面イギリス文学の「ユーモア」の系列に挙げられましょう。しかし，そこには，「ユーモア」「諷刺」といったような似て非なるものを含み，しかも「ユーモア」一つ取りあげても，親と子供とその兄弟，孫の性格が違うように，これもまた多様で多種で雑多です。早い話が，ロシア文学一つ取りあげても，ドストエフスキーとチエーホフはほぼ同じ時代の作家ですが，ド翁はスラブ文学のもつ「ユーモア」，チエーホフは西欧文学のもつ「ユーモア」とそれぞれに持味が違います。‘Le style est l’homme meme.’ (The style is the man himself.) これはフランスの博物学者ブッフホン (Buffon) の言葉ですが，ギリシャのプラトン派の哲学者ロンギヌス (Longinus) もこれと同じようなことを云っておりますし，高山樗牛の「文は人なり」でしたか，これも同じ意味に解してよいと思いますが，外国文学（特にこの場合は英米文学）に「ユーモア」が文体 (style) のなかに数えられ，かつ，重要な役割を占めている場合が多いのです。余談になりますが，トマス・モア (Thomas More, 「ユートピア」の作者) が処刑台に上って斬首直前に首斬人に云ったとかいわれている言葉があります。「ひげをのけるから一寸待ってくれ，このひげだけは大逆罪を犯していないからねえ」。これは伝説的な物語でしょうが，それにしても有名な文句です。これが事実とすれば文人に似合わぬ剛勇無類の人物です。しかし，そんなことより，伝説としても，如何にも英国人の作った，英国流の「ユーモア」がにじみ出ていますし，英国流「ユーモア」の恐らく最大傑作だと思います。

「繰り返えし」が古典喜劇の常套手段ですが，「可笑味」をもたせるとか，「笑い」を誘うには或程度の繰り返えし——誇張の反面でもありますが——これは Dickens がよく用いる手です。この作家は，誇張した言葉を用いる作中人物の，そうした言葉の繰り返えしの手法によって，一つの人物の性格を作り上げ，同時にこれが「ユーモア」を生むという，いわば性格描写の達人です。また，他面，言葉の特殊性が性格の一つのパターンを作

ることにもなり、職業を表わすことにもなります。こうした人物を作り出して、「笑いはその対象となる者にとっては常にいくらかの屈辱を与えられる」というベルグソンの理論を援用して、こうした人物に対し、読者の側から一種の社会的制裁を加えさせるのです。そこには、不調和な言葉、不似合な性格、というイメージを読者に植えつけ、この不調和が「ユーモア」、また場合によっては、或る社会、階級に対する「諷刺」を生みだすのです。これに類する一つのパターンとも云えるものは、時々舞台上で藤山寛美などによって演じられる、いわゆる船場商人の店で見かけるであろう光景が思い出されます。「暖簾」(のれん)に傷がつく、と云う船場の問屋あたりで聞かされる台詞と云いますか、‘epithet’ (性質が属性を表わす形容語)と云いますか、たとえば、主人がこの言葉をつかった時には笑いは湧きませんが、立場を代えて、使用人がかげでこの言葉を繰り返している場合(誇張)には、その言葉を聞かされる観客からは「笑い」が起こります。そこには価値観の転倒が行なわれており、これをしゃべる使用人側の立場に矛盾があることを観客は知ると同時に、権威に対する抵抗と考え、場面の異常さに気がつき、この不似合な言葉に観客は「笑い」をもよおすとともに、一種の哀感(pathos)を感じます。つまり「移調」が行なわれているわけです。

Dickens には作中人物に対して、読者に価値観の相違(または転倒)を知らせる場面がたくさんあります。抽象的に総括しますと、威張ったり、ほらを吹く人物を登場させて見る。こうした人物は、別の観点からすれば、自分の値打ち以上に誇張している、「人間って考えて見れば惨めなものだ」「人の姿のあわれさよ」「人間なんて愛すべきものだ」つまり、主観と客観の立場の相違、悲劇と喜劇を、やる人と見る人(または、読む人)が演じることになる。「おかしい」ことも立場を変えれば「悲しいこと」。このことを更に展開すれば「笑い」と「涙」、つまり「ユーモア」ということになります。物事がもつ裏の意味をさぐって知ることです。一人の作家が「ユーモア」を描く場合に、そこには、センチメンタリズム(感傷主義)と哀感が影の光に添うような状態で強く、また弱く明滅するように現われる場合が多いのです。「ユーモア」と後者が場面によって、重層、また錯綜する場合もあれば、分離して交互に持ち出される場合もあって、そこが作家(または作品)の特色でもあり、特異性とも云われるところでしょう。「ユーモア」と「センチメンタリズム」または「哀感」が重層、交錯した作家はロレンス・スターン(Laurence Sterne)であるに反し、ディケンズの場合は、この二つの‘mood’が同時的でなく、継続的に表われる場合が多いようです。とくに‘The Old Curiosity Shop’(骨董屋)などにはこの場面が多く見られます。云えることは、ディケンズの小説には「泣く場面」と「笑う場面」が明確に分離して、それぞれその領分を保っていることで、云わば、それぞれの場面が相前後して一種の潤滑油の役目を果たしています。アルフォンス・ドーデ(Alphonse Daudet)

というフランスの作家がありますが、この作家は、風俗小説、人情小説、諷刺小説、諧謔小説といった種類の仕事をした人です。ドーデの「ユーモア」は独特の南欧的なもので、例えば、アメリカ文学の「ユーモア」とアイルランド文学の「ユーモア」を混ぜ合わせたようなもので、特に「タルタラン」はアメリカの作家マーク・トウェイン (Mark Twain) の作品とこの点で似ているように思います。滑稽な観念や思いつきが随所に「ユーモア」を発散させていますが、結局英雄を主人公とする茶番劇で、同時代にのみ通用するが、あらゆる時代に亘る「ユーモア」の本質は備えていないのではないかと考えられます。本質的な思想のもつ滑稽味はえい智の一表現ではあるけれども、ドーデが目指しているのは、偶発事件がもつ滑稽味と、それにセンチメンタリズムの香りを添えたものでしょう。馬鹿馬鹿しい行為の讃歌以上になることはありません。ドーデの「ユーモア」にはセンチメンタリズムが添物の役目をしています。ドーデは目敏い観察者ではあるが、すぐれた観察者ではないように思います。どうも、ドーデの「ユーモア」の迫力は人情に直接訴えるのに由来しているようです。従って、理知的に訴え感動させることがないといえます。この点ディケンズとよく似ています。両者ともに、自分の小説を、それを書いている時でも、書いた後でも、公平に見ることができない。例えば、ディケンズが 'The Old Curiosity Shop' を執筆中、少女ネルなる作中人物を、死なすか、死なすまいかと思ひまどって、泣きながらロンドンの街を彷徨したという話があります。これは、作家が自分の作品に主観を埋没してしまった証拠で、この両者の、この二つの作品には、両作家の本命である「ユーモア」よりも「センチメンタリズム」が勝った。つまり、客観性（知性に基いた鋭い観察）よりも、主観性（感情に基いた直観）が重きをなしたからでしょう。これに関連したことについて、アンドレ・モロア (André Maurois) というフランスの小説家、評論家は「ディケンズ論」のなかで次のように適確に要約しています。『偉大なユーモア作家を作るには、如何なる資質が必要であるか。先ず第一に、単にすぐれた観察者であるだけでなく、正確な観察者でなければならない。第一に、ユーモア作家は対象から離れて、明らかに無感覚になることができなければならない。「ユーモア」の効果をあげるためには、作家は、その人物たちの間に完全にかくれていなければならない。「ユーモア」は作家に二重の役割を演じることを要求する。即ち作家の情熱は作品自体に無関係のままではいなければならない。また、作家は対象から分離し、そして、優秀な技師のもっている冷静な巧妙さをもって、一個の性格を組み立てなければならない。……「ユーモア」作家は冗談を云うものと思われている。しかし、その冗談は蔽いかくされたままであって、いつまでも慎重であらねばならない』。つまり、この意味は、「冗談」がその人の意思であり、はっきりその目的を相手が掴みとる時には、「ユーモア」は「ウイット」となり、「ジョーク」になるということです。「作家は作品から完全に分離し、優秀な技師のもっている冷静な巧

妙さをもって一個の性格を組み立てねばならない」と云うモロアの言葉は、ドストエフスキーの作品に漂う作中人物の人間性の中に深く淀んだ、いぶし銀のような「ユーモア」がそれであると思います。アンドレ・ジイド (André Gide) は「ドストエフスキー研究」のなかでディケンズの作品と比較してこう云っています。『ディケンズのロマンは凡て心情の質がえい智の質よりも優位にあることを示し、かつこれを感じしめようとする』。この表現は両者の「ユーモア」について当てはまるものだと思います。ディケンズの「ユーモア」にはセンチメンタリズムが裏打ちされているのに反して、ド翁の「ユーモア」には「哀感」が顔をのぞかせています。いま、ド翁の作中人物を二つの性格に分析すれば、ここに一つの類型が浮び上ります。「傲慢」+「謙譲と卑屈」=「自尊心の多寡」ということとなります。しかも、こうした類型は大抵の場合に知的な人間として描がかれていません。ところが、ディケンズにしてもド翁にしても「最も卑賤な人間が最も高貴な人間よりもズット神の国に近くいる」この意識こそ、貧しく傷つきやすい者を救わんとした両者の一貫した態度であり、これを救う方法として両者が読者に訴えるために常にとった手段が両者の「ユーモア」であると考えます。その表現の仕方は「涙」「笑い」「罵り」「辱かしめ」となったり、こうした‘mood’を作中人物が身辺に漂わしているものが「ユーモア」であるといえましょう。さらに、両作家に共通していえることは、ともに作中人物に独りの偉人も英雄もいないことです。平凡な日常性をもった作中人物の身辺に漂うこの種の「ユーモア」こそ読者に共感を呼び、理解される所似です。ご承知の如く、ド翁の生涯の事件は、死刑の宣告からシベリヤ追放、借金、といった人間のどん底生活の遍歴と惨苦という現実であり、ディケンズの生涯は、借金の天才である父親が負債者牢獄に閉じこめられ、靴墨工場で屈辱の少年時代を送ったことから始まっています。人生の辛酸をなめ尽した生活人です。ともに、作家としての目は、民衆の生活という現実の人生に向けられています。「人間を隣れなものとすの同情の眼ざしである」「人間の統一性を信じてはいけな」とか「神は生涯わたくしを苦しめた」という内心の叫びを持ち続けたド翁には、人間の心理を打ちくだき、心情を焼き切る悪魔の意思が伺えます。この点ド翁の作品に漂う「ユーモア」を読みとるむずかしさがあります。読者がこの人間心理の実験室を通り越さない、その向うにほのかに見えるド翁の「人間の弱さ、惨じめさに対する隣れみ」即ち彼の「ユーモア」を理解することはできないのではないのでしょうか。ド翁の「ユーモア」を暗く、陰湿であると読者が受取るのも、この辺にその理由がありそうです。

滑稽とか諧謔とか、「ユーモア」に関連してお話をしてきましたが、最後に一つ心に引っかかる問題があります。それは江戸時代の大衆小説群のなかで取りあげられる「滑稽本」「黄表紙」「合巻」(ごうかん)といった類いです。それには、「諷刺物」「市井物」「教訓物」といって、細別がおこなわれているようです。国文学に関しては全くの素人で

すので、或いは見当外れのことを申すかも知れません。いま一度、これまで述べたことに立ちかえります。ドーデの「ユーモア」は、こういう作品にでてくる人情世態を滑稽に洒落のめして描いた点で、式亭三馬の「浮世風呂」とか「浮世床」に類似点が見られますし、また一面、滝亭鯉丈の「花暦八笑人」や、梅亭金鷲の「七偏人」などの滑稽本にでてくる低俗なくすぐりを茶番劇風に作りあげたように思えます。ディケンズの「ユーモア」の一面がよくでている『The Pickwick Papers』（ピクウィック倶楽部員報告書）には仮名垣魯文の「西洋道中膝栗毛」とか、十返舎一九（じつぺんしゃいつく）の「東海道中膝栗毛」などの明かるい屈託のない「ユーモア」、さらに、仮名垣魯文の「安愚楽鍋」（あぐらなべ）に理解される文明開花期の世相に対する諷刺と皮肉が写實的に描かれている点、この両者のかもしだす‘style’に大変似通ったものがあるように思います。わたくしは、江戸大衆小説群には諷刺の色彩が強いとか、笑い飛ばす、といった行き方から、「ユーモア」と呼ぶよりも、‘comic’の要素がまざっているのではないかと考えます。その他、平賀源内の「風流志道軒伝」は、その諷刺がスィフトの「ガリヴァ旅行記」に全くよく似ているようです。

これまで述べましたところから言い得ることで、主観を押し進め、それに徹するところには「ユーモア」は生れないが、自己を客観するところに「ユーモア」が生れる、といえるのではないのでしょうか。一例をあげますと、さきに申しあげました『The Pickwick Papers』に次のような場面があります。——「人が自分の帽子を追いかけている場面ほど、本人は滑稽なくらいに苦しむ、見ている人からは慈悲深い同情をひくことは少ない。こうした瞬間は人間の生涯でも極くまれだ。帽子をつかまえるには、非常な冷静さと、格別の判断力がある。慌ててはいけな、でないと帽子をふみつけるか、行きすぎる。とんでもない方向に走って行っちゃ取りそこねる。最もよい方法は、その追跡物と一緒に走って行くことだ。用意周到にぬかりなく、つかまえる機会を伺い、徐々にその前に出て、折を見てそいつに飛びかかり、帽子の山のところを押える。次にそれをしっかとかぶる。傍観者同様に、面白い洒落とでも考えて、絶えず楽しそうに笑っていることだ。爽快な微風が吹いて、ピクウィック氏は追風によって戯れるごとく帽子ところがって行った。風が一息つくとピクウィック氏も一息つく、帽子は激しい潮流にのっているイルカのように、いきいきと楽しそうにころがって行った。その紳士は、運命だ、諦めてしまえと考えた途端、神意によって帽子の進路がはばまれなかったら、ピクウィック氏の手のとどかぬズット向うにころがって行ってしまったかも知れない。ピクウィック氏はスッカリ疲れ切っていたのであろう、二度まで追跡を諦めようとした時、帽子は一台の馬車の車輪に激しくぶつつかって停止した。ピクウィック氏は姿勢よしと見てとって、勢いよく突進して自分の財産をしっかと押え、顔に深くかぶった。そして一息ついた」。この一文でもお分りのよう

に、冷静な客観描写と誇張の文字が繰り返えされています。「涙を通しての笑い」「くすぐり（知性）笑い（感情）」こうした「ユーモア」を構成するには、物の底まで見抜く鋭い観察眼と、人間ははかないもの、頼りないもの、憐れなものとして、人間の過失や欠点をあたたかく包み込む寛容が「ユーモア」の構成に必要な要素だと思います。西欧文学のもっている「ユーモア」は特に「ヒューマニズム」に深い根拠をもっており、旧い伝統と歴史を培養土として永い年数をかけて育てあげられたものです。最後に一つ考えていますことを申し上げます。現代文学のなかで演じる「ユーモア」の性格と役割については、従来の如き作中人物の単なる個人的演技よりも、例えばアーサー・ミラー（Arthur Miller, アメリカ現存の劇作家）の作品に見る如く、社会・経済の機構、その歯車のなかにはまり込んだ人間の演じる性格と生活環境から生れ出る「ユーモア」、つまり社会生活を原点とした「ユーモア」の出現が志向されているのではないかと考えます。

思いつくままに、みなさんの参考になるもので、手ごろな書物をあげておきます。

ベルグソン「笑」（岩波文庫） マルセル・パニヨル「笑いについて」（角川文庫） 河盛好蔵「エスプリとユーモア」（岩波新書） 麻生磯次「笑いの文学」（講談社現代新書）次に少し専門的になるものでは、夏目漱石「文学評論」（岩波書店） 村上至孝「笑いの文学—スターンとスモレット」（研究社） コンスタン・ルーアク「アメリカ文学とユーモア」訳本（北星堂） 矢野峰人「英文学の特性」（松柏社） 斉藤勇「イギリス国民性」（研究社） 特殊なものとしては、トルーブラッド「キリストとユーモア」訳本（創元社）その他。この最後の書物については、岩瀬教授とたまたま「ユーモア」について話し合っている際に同教授から知らされました。 —談話会原稿より—